

より乗車、一路故郷に思いを馳せつつ博多駅に着いた。

五月二十二日、ちょうどじき母の命日に故郷に着く。三年十一カ月ぶりに家族と逢い無事を祝した。

戦後補償として、平成七年に赤十字の腕章を送ったのに対して「いぶし銀の花瓶」が贈られてきた。

今後は元氣である限り戦友会で逢うのを楽しみに、また亡くなった戦友諸君の冥福を祈りながらペンを置く。

三 南支戦線

死線を越えて

佐賀県 秀 島 貴

「我が大君に召されたる 生命栄えある朝ぼらけ

たたえて送る一億の 歓呼は高く天をつく

いざ征け兵士 日本男児」

小学生の唄う「出征兵士を送る歌」と日の丸の旗の

波に送られ、昭和十八（一九四三）年三月十三日、福岡第四十六連隊に応召入隊、約一カ月の後、門司より輸送船で勇躍祖国を離れ、東シナ海を南下した。

「日の丸の 小旗の波に 送られて

勇躍征途に 吾はつきけり」

「門司港や さらば祖国よ さくら花」

船は無事台湾の高雄港に着く。日本は四月なれど高雄は夏で暑い。

「輸送船 台湾高雄に 日焼の兵」

敵潜水艦の動き活発なれば、警戒の中に高雄港を出発。香港島に一時寄港して珠江の濁流をさかのぼった。

「香港島 沈船あまた 見ゆるかな

激戦のあと 今もとどむる」

虎門要塞辺り、防暑帽に夏衣の兵警備の歩哨に、戦地に来るとの感を覚ゆる。

「防暑帽 夏衣の兵 珍しき」

船は尚も珠江をのぼる。兩岸に支那大陸広々と見え、夕方、黄埔港の岩壁に着く。

「夏草や 上陸一步 黄埔港」

黄埔港の駅より無蓋貨車に乗せられて、白雲山を右に、やがて貨車は東山を経て、広東市内、夜の大沙頭駅に着いた。榕樹の下にライチーなどの物売りの店や、人々で賑やかな駅前である。

「大沙頭 暑き広東 夜の駅」

トラックに分乗して広東市内を通り、東山踏み切りの立哨衛兵の前をすぎ、「波第八六三二部隊」の東山本部に到着。

「衛兵所 東山本部に 夏衣の兵」

また、東山の奥村陸軍病院に白衣の人々見える。

「白衣干す 陸軍病院 風は夏」

初年兵教育係の城野久義軍曹や高良義人

班長その他より、一期の検閲まで軍事教練、戦闘訓練、演習などと鍛えられた。

「汗まみれ 一期の検閲 終えにけり」

市郊外の七十二烈士黄華岡での演習に、また軍歌「南支那派遣軍の歌」をうたったあの頃のこと、今は懐かしき思い出である。

「黄華岡 七十二烈士 眠る岡

又銃をなして 演習休憩」

入隊以来半年、一人前の兵士として各種の任務に就く。戦友も西村や汕頭などに分遣されて、各方面の警備に、物資の補強輸送に、または兵舎などの建設に汗を流した。我らは東山本部に広東警備の要員として勤務した。

「せんだんの 木陰に立哨 衛兵所」

隣の長峰隊の衛生材料庫などの支庫、分庫にて警備動哨の任務に日夜精励する。

「支庫勤務 パナナの木陰

コウモリの羽音に魂消る 動哨の兵」

「動哨の 銃剣キラリ 螢とぶ」

南国の夜の暑さにたまりかね、屋根に上がり涼をとる。

「暑き夜 南十字の星眺め

戦友と語るは 故郷のことども」

兵の楽しみは週末の外出、喜々として戦友と行く所、そこは……。

「外出の 兵を慰む リラの花」

「新町や 兵に声かく 花姑娘」

「新華戲院 映画見ている 兵達の

笑顔に暮れる 支那の町かな」

昭和十九年初め、軍經理に分遣された。珠江のそばの海珠橋の各種の軍需物資倉庫の警備に、隊長遠藤少尉

(戦死)、班長高尾伍長ほか十余人、軍属数人と、河南新墳地や東山ほか各貨物廠に、また飛行場などに、連日連夜の敵機の空襲爆撃の間隙を縫って、日夜、軍需物資の輸送や警備に励んだ。

空襲のとき機銃掃射を受け、近くに爆弾投下されて、破片やコンクリがバラバラと身边に降りそそぎ、九死に一生、本当に恐い目に遭ったこともあった。

「たこつばや 敵機来襲 五月空」

「海珠橋 榕樹の影に 夕涼む」

「月おぼろ 愛群ホテル 灯がうるむ」

昭和二十年二月ごろ、昨命により軍属二、三人と現地苦力五十人程を連れて源潭墟英徳方面に向かい、軍

需物資の輸送任務に全員頑張った。無事任務を終え、全員広東に引き揚げ海珠橋の宿舍に帰隊。

広島、長崎に原爆投下のニュースが入る。ソ連ついに参戦の報があり、我等も皆決意を胸に奮起した。しかるに戦局日増しに悪くなり、遂に日本は連合国に敗れ、昭和二十年八月十五日、戦争は終結した。

終戦の詔勅を全員無念の思いで聞く。いつも身边に命としていた銃剣も敵の手に渡し武装解除された。以後中山大学に、また河南の煙草工場と転々として、最後に関村軍官学校にて俘虜生活を送った。

「战友と 手を取りて 慟哭なしにけり

戦やぶれて 武装解除に」

「ふる里に 山河ありけり 終戦忌」

戦争というものは、人間性を奪い鬼畜同然になすものである。またそうならねば人は殺せまい。けれども全くお互いに愚かな行為であるし、残酷極まりない非情の世界である。今の若い人、また戦争を知らない人々は、平和の有り難さを本当に知っているだろうか。

今や衣食物品が余り、あふれている豊かで平和な日本、有り難いことである。

「戦なき 平和日本 半世紀

経済大国 有り難きかな」

四 今だから言える話

佐賀県 平野 三吉

常夏の太陽は容赦なく照りつける。小生は常に本部勤務だった。昭和十七（一九四二）年、潮田部隊長当番で、昭和十八年四月頃に部隊長が帰国。その後任が沖部隊長で、五月頃まで当番だったが、その後、坂本君に申し送った。その後は被服、兵器倉庫の係、ある日は衛兵勤務ある日は使役等が日課だった。少々うんざり気分である。

戦勝のニュースは北から南からとんでくる。そんな時非常呼集がかかり、身体がしびれるような言い知れぬものが全身に走った。作戦命令が出た。ようしやる

ぞ、一人前の軍人になったような気がした。

元氣いっぱい、作戦準備にかかる。米、カンパン、弾薬等々十二日分、約六〇キロを準備。勇気を出して元氣よく出発の日を待った。

いよいよ出発集合、その時、本部分隊に自転車二台が配備され、小生と酒見二等兵に渡された。

出発以来二日、三日と過ぎた。行軍は山岳あり川ありで、自転車は押して行くばかり、小生はこんなことでは身がもたない。自転車をもちあましながら行軍は続く。自転車のペダルが足にからみ、もう体力の限界とみた。道は山岳岩場、よろけるふりしてペダルを岩にぶつけた。ペダルがボロリと落ちた。シメシメとばかりに「班長殿に申し上げます。大切な自転車を壊しました。申し訳ありません」と告げた。「しかたない、乗れない自転車は捨てよう」小生は内心ほっとした。やっと身軽になった。

酒見二等兵は自転車を大切に運んだが、数日後行軍はますます厳しくなった。日はとつぷりと暮れてもまだまだ行軍はつづき、まっ暗な細道、それに山